

医療薬学研究成果を通じた臨床薬剤師の社会的プレゼンス向上を考える

—Pursuing pharmaceutical research-driven upgraded social presence of pharmacist

オーガナイザー

尾田一貴 (熊本大病院薬)
榎屋友幸 (鈴鹿医療大)

臨床薬剤師は薬物治療参画などの臨床的活躍を通じて、徐々に医療におけるプレゼンスを固めてきた。さらに突き抜けたプレゼンスを発揮するためには、非医療従事者や一般社会からの認知を強化する必要があると考える(=社会的プレゼンスの向上)。

しかし、従来の臨床的活躍を全うするのみでは、社会的プレゼンスの確立には多大な時間を要すると考える。社

会的プレゼンスの飛躍的な向上のためには、臨床薬剤師が実践しているファーマサイエンスを基盤とした医療薬学研究成果が、医療の質向上に貢献していることを、社会にアピールし、社会とつながることが不可欠と考える。

本シンポジウムの目的は、少年のように大志を抱く新進気鋭の臨床薬剤師の実践する医療薬学研究成果をどのように社会に発信し、臨床薬剤師の社会的プレゼンス向上につなげていくのかについて考える機会を持つこととする。

(尾田一貴)

ウィズコロナ・ポストコロナ時代に対応した薬学教育手法のパラダイムシフト

—仮想現実(VR)が薬学教育を変革!? 新たな時代へ

オーガナイザー

武田真莉子 (神戸学院大薬)
三原潔 (武蔵野大薬)

今般の新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、医療系人材育成を行う大学では、臨床現場で行われる実習が中止または縮小されるなど、実習機会に大きな制限がかかった。薬学においても、臨床実習に加え、調剤手技や患者対応方法を修得する臨床準備教育が多大な影響を受けた。一方、そのような制限を受けながらも、薬剤師を目指す学生を育成する大学は、独自に様々な工夫

をしながら教育の質や量を低下させることなく実践形式の学修機会を作り、薬剤師業務に必要なとされる技能の修得を図ってきた。

本シンポジウムでは、昨今、目覚ましい発展を続けているデジタルトランスフォーメーション(DX)等の技術をいち早く薬学教育に取り入れて、既に現場で実践している大学の事例を紹介し、医療人材育成におけるDX技術の現在の進捗や課題、今後の展開などを議論することで、DX技術を活用した薬学教育現場の未来を展望したい。

(武田真莉子)

糖尿病網膜症Update

オーガナイザー

櫛山暁史 (明治薬大)
宮田佳樹 (帝京大薬)

糖尿病人口の増加と共に糖尿病網膜症の患者数は今後さらに増加することが予想され、広く実施可能な「網膜症を発症・進展させない治療」が重要となる。糖尿病網膜症の発症・進展は、血液網膜関門(BRB)の破綻が起点となる。BRBの破綻には網膜血管内皮細胞と協調してBRBを構築するペリサイト消失が深く関与する。

また、網膜毛細血管とそれを取

り囲むニューロンやグリア細胞がneurovascular unit(NVU)を形成し、NVUを標的とした網膜症治療が期待されている。さらに、薬物の網膜送達性の向上を目的とするナノ製剤化技術等の薬物送達技術や新たな創薬候補化合物の探索研究は、近年大きな進歩を遂げている。

本シンポジウムでは、眼科領域から薬学研究者ならびに研究医として高いアクティビティで研究を進めている先生方に最新の研究成果をご講演いただき、今後の網膜症研究の展望について議論を深めたい。

(宮田佳樹)

生合成酵素と創薬化学の新展開

オーガナイザー

牛丸理一郎 (東大院薬)
阿部郁朗 (東大院薬)

近年、生命情報科学や計算科学の飛躍的な発達に伴い、生体内において代謝物化学変換を担う生合成酵素の重要性や医薬品化合物創出への応用可能性が以前にも増して示されつつある。

特に、ゲノムマイニングによる未知天然物や未知遺伝子の探索、生物活性天然物の生合成における酵素群の新触

媒機能の同定、酵素反応機構の精密解析、酵素の機能改変による新規反応開発研究など多岐にわたる分野で活発化しており、生合成酵素研究が創薬化学に与える影響は今後ますます大きくなるであろう。

本シンポジウムでは、天然物生合成や酵素工学など多様な分野で活躍する第一線の研究者をシンポジストとしてお迎えし、生合成酵素研究の最新成果を共有すると共に創薬に向けた新たな可能性についても議論したい。

(牛丸理一郎)

化学系薬学部会・医薬化学部会合同シンポジウム

Synthetic Medicinal Chemistryの最先端

オーガナイザー

平井剛 (九大院薬)
大和田智彦 (東大院薬)
松永茂樹 (北大院薬)
荒井雅吉 (阪大院薬)

モダリティの多様化が推進される中で、低分子有機化合物や天然有機化合物が重要な分子群であることが再認

識されている。一方で、新規化学反応の開発による低分子化合物のケミカルスペース拡張が進んでいる。このような現状を積極的に生かし、既存の枠にとどまらない次世代の低-中分子医薬品創製に向けた研究を啓発することを目的とし、化学系薬学部会と医薬化学部会が協力し、最先端の有機化学を中心とする薬学研究を一堂に会する国際的

な場として、本シンポジウムを企画した。

最先端有機合成化学と最先端創薬化学の接点にフォーカスし、浦口大輔教授(北大)、石川稔教授(東北大)、Gong Chen教授(中国・南開大)の計3人の講演者による国際シンポジウムを開催する。なお、本年会では本シンポジウム後に、同分野の海外研究者として、Xiaogunag Lei教授(中国・北京大)の講演会が開催される。合わせてご参加いただくことをお薦めしたい。

(平井剛)

祝 日本薬学会 第143年会

(順不同)

立命館大学 薬学部

〒525-8577
滋賀県草津市野路東一丁目一
電話 〇七七(五六一)二五六三



京都薬科大学

〒607-8414
京都市山科区御陵中内町五
電話 〇七五(五九五)四六〇〇



鈴鹿医療科学大学 薬学部

〒513-8670
三重県鈴鹿市南玉垣町三五〇〇一三
電話 〇五九(三四〇)〇五五〇



愛知学院大学 薬学部

〒464-8650
名古屋市中種区楠元町一〇〇
電話 〇五二(七五一)二五六一



岐阜薬科大学

〒501-1196
岐阜県岐阜市大学西一〇二五〇四
電話 〇五八(二三〇)八一〇〇



新潟薬科大学

〒956-8603
新潟市秋葉区東島二六五一一
電話 〇二五〇(二二五)五〇〇番



横浜薬科大学

〒245-0066
神奈川県横浜市戸塚区俣野町六〇一
電話 〇四五(八五九)一三〇〇



明治薬科大学

〒204-8588
東京都清瀬市野塩二一五二二一一
電話 〇四二(四九五)八六一一番代